

Title	日本吉利支丹宗門史(第七回)
Sub Title	
Author	Pages, Leon(Yoshida, Kogoro) 吉田, 小五郎
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.4 (1933. 12) ,p.129(709)- 145(725)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19331200-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本吉利支丹宗門史 (第七回)

レオン・パジエス著

吉田小五郎譯

第十章 一六〇八年^(註一) (慶長十三年)

薩摩と肥前に於けるドミニコ會員——薩摩に於ける迫害——十一月十七日、レオン・シチザエモンの殉教——フランシスコ會員——ポウロ五世の勅書 “Sedis Apostolicae”——印度に於けるイギリス人——日本人とマカオの住民との衝突並に嚴罰

宗教方面から見ると、公方様は年とるに従つて漸時^{カキホトケ}神佛に對しては迷信的に、眞の教に對しては憎惡を以て對するやうになつて來た。併し彼は迫害を實行するには至らず、而も其教が改宗者の中にあつて鞏固となり、其領域を未信者の上へのばすのを干渉しなかつた。諸侯も亦多くは主權

日本吉利支丹宗門史 (吉田)

者にならつて、寛大な態度をとり、深く同情を寄せて居た。或る者の如きは、改宗せんが爲、只管公方様の許可を待つてゐる始末であつた。

その間に互に連絡のない迫害がおこつて此平和を亂した。迫害は主として、薩摩、肥後、及び毛利殿の領内に起つた。

ドミニコ會では、薩摩や肥前の教會堂が中々盛であつた。四月マニラで開催された管區長會議では此管區の管理^{グーベルヌール}者として神父バルタザール・フォルト (Balthasar Fort) を推舉し、一六〇六年神父アロンソ・デ・メーナ (P. Alonzo de Mena) の創立にかゝる傳道所と濱町 (Famamatchi) のノートル・ダム・デュ・ロザリオの傳道所、カシマ (Cachima)

(七〇九)

一一九

の聖ヴィンセント (Saint-Vincent) 傳道所並に肥前に於ける全部二箇所の傳道所を合併した。

其後、間もなく聖ポウロに奉獻された佐賀の教會堂が峻功した。

薩摩では、神父ジョセフ・デ・サン・イヤシントが七月二十二日(○慶長十三年六月十一日)即ち聖マリヤ・マグダレナの祝日にシチエモン (Chitchiyemon) といふ身分ある侍に洗禮を授けてレオン (Leon) といふ名を與へた。異教徒の間に伍して、自然の掟に従つて生活をし、永遠の救済を得んが爲には領主の命令に背く事を憚らなかつたシチエモンは受洗後四箇月にして殉教する事になつた。彼が斷間なく祈禱し、尙彼の様子に聖い精神によつて靈感を受け、犠牲^{サクリフィス}の譽を得るのは宿世の約束事といふやうに思へた。

薩摩の大名^{オランダ}が、其領内に根據を構えたドミニコ會の人々が何等物質的の利益を得させては呉れず(何故となら、利益が、宣教師を迎入れた彼の唯一の動機であつたからである。)マニラからは一艘の船も着かぬことを知り、他方キリシタンが、彼が臣下に強ひてゐた絶對的服従を拒みはせぬかと懸念し、それを放任しておいて末は彼等の手の中に陥つて不幸な目にあひはせぬかと顧慮して外國人の宣教師を

追放しようと思つたのは宛も此頃の事であつた。一六〇八年八月、彼は神父デ・モラレスに公方が薩摩にゐる宣教師が一人も幕府^{バツカ}に來ないことを不服としてゐる事と、彼等宣教師の中一人京都に上つたが宜からうといふことを言はしめた。

此頃では、最早、長崎を外にしては公方の許しを得た教會堂は三つしかなく、それは京都に於けるイエズス會の神父達の教會堂、もう一つ大阪に於ける同會神父の教會堂並に江戸に於けるフランシスコ會員のそれであつた。其他のものは言はず^{もぐり}潜りのやうなもので、それも特別の領主等に黙過されてゐるといふだけの事であつた。公方も亦かうした事には眼を閉ぢてゐた。

ドミニコ會の宣教師等は、神父ド・メーナ (P. de Mena) が五年前幕府に行つて大いに公方の優遇を受けたと答へることが出來た筈である。然るに長老なる神父デ・モラレス (P. de Moralez) は首府に赴き、大いに優待された。

長老の不在中、長老代理、ジョセフ・デ・サン・ト・イヤシント (P. Joseph de Sainte Hyacinthe) とイヤシント・オルファネル (Hyacinthe Orfanel) の兩神父が留守を守つて居た。國主は切支丹教徒に信仰を捨てるやう命令した、然る

に之を拒絶した者は追放された、就中齡二十歳の若い國主ドン・ディオゴ(D. Diogo)が著名である、彼に就いては既に前に述べた二人の神父は此の致命的の打撃を避けたいと思つたが、さうはいかなかつた。オルファネルは老侯を訪問して見たが、敬意を表されたばかりで何の得るところもなかつた。それで彼は慎重に考へて若い國主を訪問しなかつた。

總てのキリシタンが教會堂に行くこと、神父をして其住居から外出させること、並に宣教師等の所には何によらず一切、食物さへ入れることを嚴禁した。ジャン(Jean)といふ若い癩病患者は、感謝の爲に、なほ引續いて神父等を助けてゐた、然し人々は廢疾者として、彼の行動には注意を拂はず、彼が往來することを放任しておいた。

レオン・シチエモンはドミニコ會傳道の最初の殉教者であつた。平佐(Frisko)の奉^{グイベルスール}行フォンゴ・カンガノカミ(Fongo Cangacami)は信仰を捨てよといつて彼に三日の猶豫を與へた。レオンは自分を動かさうとした兩親や友人等に答へて『御身等の好意は此世限りのものであるが、私の最後の目的は永久の生命である』といつた。彼は死刑の宣告を受けると、未信者なる妻に向ひ『若しそなたが私

を愛し、再び天國に於て相見え聖き結婚をする事を望まれるなら、御身洗禮を受けられい』といつた。彼は十六歳の長子に同じ道を踏むべきの約束をした。洗禮を受けてミツシエルといふ名を得た七歳になる弟の方を、彼は教會堂にあづけたいと思つた。彼は神父オルファネルを訪問した、極く最近告白したばかりで、其必要を感じてゐなかつたから、告白の必要があつた譯ではないが、天國に昇る最後の階段たる通路をキリシタンらしく通ることを教はらうといふ爲であつた。彼は自分を死刑にする爲に派遣された八人の兵卒達を大いに歡待した。併し彼は切腹して自殺する事だけは拒絶した。彼は自分の棺の用意を整へた後沐浴した。次いで彼は白垢を着て大小刀を腰につけた。そこで彼は自分が信じてゐる宗教故に最も嚴肅な行爲をする爲、二つの路の交叉した辻の廣場で死にたいといつた。

白洲に來ると、彼は大小をわたした。次いで片手に念珠^{ロザリ}をとり他の手にはその表に救主が磔から下されるところを畫いた油繪をとると彼は半時間の間祈り、更にもう半時間の猶豫を願つて、又も祈つた。それから彼は合圖をして、日出の少し前に首を刎ねられて永恆の譽を享け、同時に彼が贖主イエズス・キリストの幸多き幻想を享けに行く事と

なつた。

彼は元薩摩のジヨナイ (Jonay 五代か) の者であつた。其遺骸はマニラに送られて、ドミニコ會の神父等の遺骸が納めてある禮拜堂の中に納められた。彼が犠牲に供されたのは十一月十七日(十月十日)であつた。

江戸のフランシスコ會の宣教師等の傳道は盛であつた。彼等の會堂は宗教的の建物らしい所は一寸しかなかつた。宗教の用に供された其他の建物は特別の家の外見を呈してゐた。

紀の國 (Kinocouni) の領主は一種の癩病を直して貰つてから、自費を以て、其首府和歌山 (Wakayama) に修道院と教會堂と病院とを各々一つづつ建てた。

同年江戸と伏見の修道院が再興された。

フランシスコ會の宣教師等は江戸から十二リユウ距つた關東の小港浦川 (Ouragawa) に更にもう一つ修道院を建てた。

諸教團では、始終ローマ及びマドリッドに訴へてゐた、といふのは教皇の御力によつて彼等が異常な熱心を以つて

従つてゐた苦しい境涯から救つて貰ひたいといふのであつた。彼等は終によく其望を達した、此年六月十一日(四月十九日)教皇パウロ五世 (Paul V) は勅書 *Sedis apostolicæ providentia* の中で、深慮をめぐらして判断せる結果、イエズス會の外の教團が支那及び日本入國に關する一五八五年一月二十八日附と一六〇〇年十二月十二日附の彼が先行者グレゴリオ十三世 (Grégoire XIII) とクレメント八世 (Clément VIII) 兩教皇の憲法を無効とすべきであるとした。グレゴリオ十三世は、教皇及び聖座の特許なき前記の教團に對し此方面の傳道門戸を絶對に閉して來た。クレメント八世は、教を授け信仰を確立すべき魂は無限にあるのにイエズス會の宣教師だけでは十分といふ譯には行かないといふ立場から、漠然と入國を許したのであつたが、彼も東印度やゴア、即ちポルトガル領の國々からのみ入國してよいといふ制限を附して、フィリッピン諸島並に西印度を通つての入國を嚴禁しておいたのであつた。現にイスパニヤのカトリック王、ドン・フィリッペ三世 (D. Philippe III) の請求もあり、又ポルトガルと別の道を通つて印度に入ることを禁じるといふことは、人々の望む結果を得る所以でなく、且つ決してカトリック信仰の進歩の爲に徳にな

らないといふことが経験によつて明白になつたところから、教皇は邪魔物は總て除いて、もつと完全の自由を興へんと欲し、先に擧げた憲法にかなひ且つ又どの道を通つて印度に行くも妨げないこととした。^(註三)

オランダ人は海上に跋扈して、各國に手をひろげて商業關係を結んで居つた。此年、アダムスの同僚で、前年シヤリテ號^(○リーフ)の司令官クワケルナツク^(Quackernack)と一緒に印度に来て居たサントフォールト^(Sandvoort)がパタニ^(Patane)から日本に戻つて來た。クワケルナツクは最近ポルトガル人に對する戰爭中死んだのであつた。サントフォールトの使命といふのは其同胞と日本帝國との間に商業關係を調へることであつた。其結果は一六〇九年^(○慶長十四年)二隻のオランダ船の渡來となり、平戸に支店即ち商館を立てるに至つたのであるが、その事は後で述べる。

ジエームス一世(Jacques I)の治下、イギリス人の印度に於ける最初の植民は此年行はれた。一商館^{コンツァール}がマラバール(Malabar)の海岸に建てられた。アダムスは之を知り、當時、イギリス人を日本に招いて、自分の信用を彼等の爲

日本吉利支丹宗門史(吉田)

に用だてようといふ考を抱いて居つた。イギリス人の爲といふ彼の計畫は一六一三年に至つて實現せられ、イギリス商館の建設となつた。

此年、オランダの海賊に對する恐怖はポルトガル人がマカオから歲航船を送ることを妨げた。同時にマカオで起つた不祥事件は、ポルトガル人のために酷い打撃を興へた。有馬のドン・ジャンの一艘は此港で一冬を越した。此船の乗組員と土地の人々との間に喧嘩が起り双方から死者を出した。當時ポルトガル人の司令官はアンドレ・ベツソア(Andre Pessoa)で、彼は若干の日本人に日本人の方が悪いのだといふことを證人として署名させた。併るに此人々は歸國すると、之と反對な態度に出で、ポルトガル人に對する酷い非難を駿河に訴へ出た。

此年の始、マニラに住んでゐた日本人が、當局に對して暴動を起した。總督^{グイベルヌール}は、彼等日本人に對してクリストバル・デ・アスクエタ・メンシヤカ(Christoval de Azcue-ta Menchaca)を遣した、彼は彼等を鎮定し、且聖アントニヨの草庵の近所にあつた日本人の陣を破壊した。

(註一) Gio. Rod. Girano. Annua del Giappone del 1609 e 1610. Roma, 1615.-Martirio di IX cristiani. Aduarte, t. I. I. J. C. 67.-Orfanel, e. 2. 3, 5.-Santa Maria. Chron. de'S. Joseph.-Juan de la Concepcion, t. IV, e. 4, 9 et 14.-Bulair romain.-Valentyn.-Harris.

(註二) 勅書の原文を見られよ。(附録十五)

第十一章 一六〇九年^(註一) (慶長十四年)

公方様の命令による琉球侵入——臺灣と交通を開く計畫——
 宗教狀勢——元日本の長老、神父フランセスコ・カブラ
 ル及び神父オルガンチノ・グネツシ外多數の宣教師の死——
 一月十一日死におくれた慈悲役二人と其子等の殉教——
 アンドレ・ハツソアの率ゐたるポルトガル船マドレ・デ・
 ディオス號の到着——石火矢を備へたるオランダ船赤獅子
 號——キルレム・デ・ナツソの偽書——平戸に於けるオラ
 ンダ人の支店——ドン・ロドリゴ・デ・ヴィウエーロ・イ・ヴ
 エラスコの難破——彼が參府旅行——十一月十四日平戸の
 生月に於ける三人の殉教者——ドミニコ會の總長^{シエネラル}の決定
 ——イスパニヤ、オランダ兩國間の休戦。

皇帝は其領土を日本以外に伸さんと欲し、先づ支那人が
 リエウ・キエウ (Lieou Kieou) と呼んでゐる琉球の島々に

目をそゝいた^(註二)。此島には、地味肥えて良港もあり、當時支
 那及び日本間商業の中心地であつた。明朝の創始者たる支
 那の皇帝太祖の時代(我が紀元の一三七二年)より、琉球は
 支那の主權を認めてゐたが、それは實質よりも寧ろ表向き
 のことであつた。太閤様は晩年に、此群島の王^{フランス}を威嚇し
 て日本の方に服屬させやうと試みた。然るに朝鮮遠征と同
 時に行はれた此計畫は聊かの成果もなかつた。一六〇九年
 (〇慶長十四年)の夏、皇帝は薩摩の國主^{フランス}に命令を下し、琉球群島
 を征服させることとした。此領主は三千人の日本人を引き
 つれて本島に攻め入り、王尙寧(Changning)を虜とし、此
 王國を屬國のやうにしてしまつた。^(註三)

次いで公方は臺灣島と關係を結ばうと計畫した、此臺灣
 は肥饒なる上に又廣大で、一方日本、他方マカオ及び支那
 の間にあつて、航海には非常に重要なものであつた。避難
 港を得ようといふので、公方は同地に船を遣り、言葉を學
 び、住民の意向を質さんが爲に若干の智者を乗せてやつた。
 然るに臺灣の住民は、外國人に亂暴し、其中の大勢を殺し
 た。後に残つた者達が數名の土着の者を捕虜として日本に
 連れ歸つた。公方は事件の報を聞いて、捕虜を懲罰すると
 思ひの外、いろんなものをふんだんに遣つた上に國に歸し

てやつた。

教會の一般の狀勢は中々盛であつた。此年、ポウロ五世の下した百年目の大赦令が發表された。其禮拜が帝國のあらゆるキリシタンの團體の中で行はれた。教會堂のない地方では、人々は十字架のあるところに集つた。

宣教師等の窮迫は教の宣傳を緩漫ならしめるばかりであつた。實際、彼等は働き手を十分支持して行く事が出来なかつた。^(註四)併し、傳道師を養はんが爲に一口のパンをぬいた、信者の恵が時々あつて助けとなつた。キリシタン宗を奉ずる日本人は實に氣前がよかつた。同時に彼等は死んだ人に對して實に慈悲深く、或る者の如きは死んだ人の魂の爲ミサ聖祭を上げて貰ふ爲に、着物をぬいだ位であつた。

此年イエズス會では其宣教師三人を失つた。四月十六日(○三月)神父フランシスコ・カブラル(P. Francisco Cabral)がゴアで歿した、彼はポルトガル人で嘗ては日本の長老を^{メイソン・ウロウエックス}つとめ、後支那の長老に轉じ、最後にゴアの誓願修士院を管掌し、六箇年の間印度の地方管區長に任じて居つた。彼は八十一歳で、法齡五十五歳であつた。四月二十二日(○三月)には神父オルガンチノ・グネツシ(P. Organitino Gnecc-

日本吉利支丹宗門史(吉田)

ti)即ちオルガンチノ・ソルヂ(Organitino Soldi)が死んだ。彼はイタリー人で享年七十九歳(法齡五十六歳)十八年前から、四誓の誓願修士であつた。彼は日本に暮すこと四十年、此間殆んど全部京都の長老として過して來たのであつた。彼は病弱の爲、晩年の三年間は已むなく休養したのであつたが、而も彼は此三年間を祈禱とイエズス・キリスト御受難の瞑想に獻げた。最後に(日附不明)神父フランシスコ・デ・パイバ(P. Francisco de Paiva)が大阪で亡くなつた。彼はポルトガル人の誓願修士で享年三十九歳であつた。(イエズス會に在ること二十三年、中日本に於ける九年は大阪の傳道所に過した。)

最も模範的の諸侯の中には、筑前秋月の領主黒田惣右衛門殿の如きがあつて、彼は至聖の死に様をした。彼は病中、致々として、ゲルソンの書(Le livre de Gerson)やギア・ド・ベカドール(Guia de peador)を自分の爲に讀ました。彼は世子パウロ黒田長門殿(Paul Couronda Nagatodono)に遺言を以つて信仰を貫くべきを命じ、他に何の希望も述べなかつた。^(註五)此世子は果してしつかりして居つた。其主君は彼に中途で挫折させやうとしたが、成功しなかつたのみか、却つて彼に敬意を表し、尙ほ己が養女を以て彼に娶は

せた。

肥後の教會は別として、どの教會も皆平和であつた。帝國中最も勇敢なる將軍の一人であるが、道德觀念に缺けた主計殿(○加藤 清正)は、其暴力を否認するキリストを默許することは出来なかつた。後に残つた慈悲役ミゲル・ミツイシ・

ドコエモン(Michel Mitsouichi Hieyemon)とジャン・フ

ァットリ・チンゴロ(Jean Fattori Tingoro)の二人は、四

年來残酷な監禁の中に苦しんでゐたが、尙ほ彼等は牢内に在つて傳道を續けて居つた。一六〇三年、ジャン・ミナミ・ゴ

ロザエモンが殉教した頃、八代には三人の主なる奉行が居

つた。即ち士分(ノブレス)の頭分たるカクザエモン(Cacuzayemon)

とノイリ・ハチエモン(Noiri Fachiyemon)及びカニエ・ヨ

ヘウエ(Canize Jofioye)の三人で、いづれも民衆の間に權

力を持つて居つた。身持が悪くて冷酷なファチエモンは迫

害の中心人物であつた、が一方ヨヘウエはクリシタン教徒

の不仕合に同情を寄せて居つた。ファチエモンの急死する

や、其子にして後嗣なれど彼とは大變違ふノイリ・キウゾ

(Noiri Kiouzo)はヨヘウエと一緒になつて、此二人の囚人

の釋放、若しくは追放を主計殿に願つた、又若し主君が之

を承知しなかつたならば死刑の宣告を與へて永遠の囚はれ

の苛酷に委されるやうに願つた。此二人の奉行の仲介も二人が期してゐた成功は修めなかつた。暴君(タイラン)は例の二人の囚人を其妻諸共に首を刎ねるやう命令した。それでも彼は其妻を大目に見る事だけは承知したが、數日の後囚人の幼い二人の子供、十二歳と六歳の天使のやうな子供の處刑を命じた。

ミゲルとジャンは刑を言ひ渡された。時に彼等は精神的の父たる宣教師に宛て、悲痛な告別の手紙を認め(註六)、なほ背教者に對して別に手紙を認めて、彼等の後悔を促した。

一月十一日(○慶長十三年 十二月六日)人々は告白者等に直ちに首を

刎ねると通じた。二人はいづれも聖なる主にならつて十字

架上の死を望んでゐたのであつた。併し、ジャンは同僚に

向つて、此死は如何にも光榮なものであることを認めさせ、

更に彼は次の如く付け加へた。『我々は寧ろ酷い苦しみに

あひ身は千々に切りさいなまれたいと望むべきだ。』『よし

此恩恵に與らせよう』と奉行(Le Boungeio de la justice)

がいつた。奉行等は民衆の心が涌きたつ事を恐れて、大急

ぎで殺してしまふつもりであつた。然るに其報一度ひろが

るや、素晴らしい人が集つて來た。

告白者等は例によつて腕を結へられ首に繩をかけられて

牢から出た。ジャンは首を堅くしめられることを望んで居つた。彼は殆んどしめ殺される程酷く結へられた。一人の背教者は痛く感動して聲高らかに懺悔をした。

ミゲルとジャンは神をほめつゝ進み、嘗て自ら死刑の宣告を受けた人々に教へた事を實行しつゝ、又彼等の罪の贖の爲に、忍耐して苦しみを受けつゝ目を天の方に向けて居つた。敬虔に終りに近づき、死んでイエズス・キリストの許に行く事を急いで居つたミゲルは、自分についてゐた兵士を自分の方に引寄せたやうに思はれた。病身で死にさうなジャンは大層きつく縛られて苦しき歩を續けた。

フレデシオン・デ・ラ・ジュネラス
判官は十二歳になるミゲルの子のトマスと漸く

六歳になつたジャンの子ピエールを連れにやつた。

其母及び祖父ジョアキムにより立派な教育を受けて來たトマスは、言はゞ殉教者向きに出來て居つた。度々母や祖父は彼にいつた。『子供よ、お前泣くなら、殉教者にはなれぬぞよ』彼は祖父と母に暇乞をし、若干の銅錢は之を遊び仲間に分けてやり、晴衣を着て、町の門の邊りで告白者等に追ひついた。ミゲルは我子の意向を知つて大層慰められた。

其職を果すことを急いでゐた奉行等は攝理の不思議の御

意向によつて、無辜の人々の血が、奥まつたところにある刑場にしみ込んでゐた罪人の血と混じらないやうに、いつもの刑場の前で行列を止らせた、されば其土をとると全く純粹な血が手に入れられた。

告白者等は跪づいた。ミゲルは一撃を以て首を刎ねられた。トマスは其父の遺骸の前で死にたいと思ひ、座つて腕を組み、そして致命の一撃を受けた。ジャンも同時に一撃を食はされた。

幼いピエールは母の許にはゐないで、彼をかくさうとした祖父の許にゐた。捕史はピエールを要求し、目を覺した。同じく父から覺悟させられた此感心すべき子供は、死に行く爲によるこんで目を覺し、之は信者にとつては感化の種子となり、異教徒にとつては當惑の種子となつた。

人は彼を腕にだいて刑場に連れて行つた。血を見ても彼はびくともしなかつた。彼は跪づいて首をのべた。三人の劊手は其職を拒んだ。一人朝鮮人の奴隸が三撃までやつて漸く完全に殺した。

奉行は三人の最初の殉教者の遺骸を細かにきりきざませたが、幼いピエールの遺骸はそのまゝにして手をつけないでおくやうに命令した。キリシタンは之等の貴重なる遺骸

を總て埋葬することが出來た。

日本の習慣に従つて、處刑の爲に其鎗を貸した奉行は、それを受けとり乍ら叫んだ。『私はどうも今後これを持つ資格がない』かくて主なる奉行カクザエモンは恐らくキリシタン教徒たる友の爲か若しくは己れ自身の爲にジャン及びミゲルの首級を遺物としてとつておかせた。

四本の鎗につけられた首級は町の東門にさらされた。後になつて一キリシタンが遺骸を盗み出して、それを肥後の外なる柳(Yanaghi)に移し、そこから更に上津浦に移した。而して同地にはビエールの完全の遺骸がとつてあつた。其他の遺物は有馬の學林に送られた。

四月の初め、神父デ・モラレス(P. de Morales)は幕府から薩摩に歸つた。彼は直ちに同僚の宣教師と共に同地を立ち去るべきの命令を受けた。彼は材料を持ち去る爲教會堂を壊した、そして五月の初め、そこにあつた病院の癩病人をひきつれて長崎に向けて出發した。彼は殉教者レオンの遺物を持つて居つた。ドン・ディエゴ及び其他の追放人達の間もなく彼と一緒になつた。

神父デ・モラレスは神父オルファネルを肥前に遣つた。

同地のキリシタン宗門は盛で、二三年前から、デ・メーナ(De Mena)デ・ルエーダ(de Rueda)の兩神父とフライ・ジュアン・デ・イヤシント(Fr. Juan de S. Hyacinte)が居つた。神父ジヨゼフ・デ・サン・イヤシントは當時京都に遣られて、其處でノートル・ダーム・デュ・ロザリヨに獻げた教會堂を建てた。

神父デ・モラレスは長崎に一つの會堂を建て、ノートル・ダーム・デュ・ロザリヨと聖ドミニコに獻げた。

七月、神父・ジュアン・デ・サン・トマス(R. P. Juan de S. Thomas)が肥前に到着した。彼は管區長であつた時に、フィリツピンから代理管區長とする爲第一位の宣教師を遣はしたことがあつた。此神父はアントニオ・デ・サン・ヴィセンテ(F. lai Antonio de S. Vicente)と一緒に連れて居つた。

二年前から、ポルトガル船が來なくなつた。従つて物質的の援助を缺いて居つた。併し神の攝理によりどうにか事缺くやうなことはなかつた。終に、一六〇九年六月前代未聞の事であるが、航程四十五日の後、丸型の大船(caraque)マードレ・デ・ディオス(Madre de Dios)號が十人の宣教師

とイエズス會の神弟二人をのせ、百萬エクス餘を積んで長崎に着いた。同船は嵐とオランダ人の厄は逃れたが、恐ろしい災難が此船を待ち伏せてゐた。それといふのは前年マカオを統治して居つた甲比丹アンドレ・ベッソア André Pessoa が率ゐて居つた。ベッソアは朝廷に理由を陳情したところ、嘉納された。然るに長崎奉行左兵衛は君主の意向を變へることが出来た。此成行は後に掲げることとする。

オランダの東印度商會の商取引は當時著しく増加して來た爲に、其頃から之に宛てる爲に、四十艘の船と五千人以上の船員とを擁して居つた。同商會はジャバ(Java)スマトラ(Sumatra)セイラン(Ceylan)ジョホール(Johor)ケダラ(Kedala)モルッカ諸島(les Moluques)ベルガル(Bergal)並に支那と關係を結び、而も之等の國々の大部分に商館を建て居つた。

一六〇九年三月、提督フェルホエフェン(Verhoeven)の指揮の下に一六〇七年首府を發つたオランダ艦隊の中二隻の船がジョホールから日本に行くやうにといふ命令を受けた。之即ち矢の又統のついた赤獅々號(Lion-Rouge avec le Paiseau de fiches)と快走船グリッフォン號(Le Griffon)

日本吉利支丹宗門史(吉田)

とであつた。^(註七)此二隻のオランダ船は七月三日(〇六月)平戸に到着した。

アブラハム・ファン・デン・ブレンク(Abraham Van den Broek)とジャック・ピック(Jacques Pirk)の二人の手代はサントフォールト(Sandvoord)と一緒に朝廷に赴いたが此一行は、自分達の間で作製し乍らオランダの州總督、ナツソーのモーリス(Maurice de Nassau)の手から出たといふ觸込の一通の書翰と、^(註八)海上で掠奪した黄金や象牙等大部な贈物を持參して行つた。總て異國人と關係をつける事を熱望して居た上に、アダムスが側にゐてオランダ商會の富と勢力とを口ぐせのやうにいつてゐたので君主は彼等を優遇し、尙四隻の船を以て通商を營み、平戸に商館を建設するの自由を許した。オランダ人は毎年二隻の船に支那の商品をいづばい積んで遣る約束をした。皇帝は州總督に返翰を送つた。^(註九)

オランダ人等は平戸の領主法印によつて大いに好遇せられた。こゝに於てか彼等は其首都に商館を建て、ジャック・スペックス(Jacques Speck)をもつて主任となし、此下に五六人の人をおいて彼の命令を守らしめた。

平戸の港は其河口が狭く、爲に、之に入ることは困難で、

(七九)

一三九

大船よりは寧ろ小船の方を受け入れるやうに出来てゐた。併し其港内は廣大で而も完全に避難の出来るやうになつてゐた。^(註七)

二隻のオランダ船は十月三日(〇九月六日)出帆してバンタムに向ひ、それより更に歐洲に行くこととなつた。

ドン・ジュアン・デ・シルバ(D. Juan de Silva)に指揮權を譲つたばかりのフィリッピン總督ドン・ロドリゴ・デ・ヴィヴェロ・イ・ヴェラスコ(D. Rodrigo de Vivero y Velasco)は七月二十五日(〇六月二日)メキシコに行く爲に乗船した。彼は三隻の船をもつて居つた。即ちガリオン船聖フランシスコ號(San-Francisco)、旗艦サン・アントニオ號(San-Antonio)及びこれより小さなサンタ・アンナ(Santa-Anna)の三隻が之である。此旗艦には前總督と共にイエズス會の神父ペドロ・デ・モンテス(P. Pedro de Montes)が乗つてゐた。師は既に働き盛りの年であつたが病身であつた爲、^{スリニュー}長上の教師がもつと氣候のいゝところに遣はすのであつた。輸送品として約二百萬の商品を積んで居つた。艦隊は恐ろしい嵐に遭つた。サンタ・アンナ號は豊後の海岸で坐礁し、而も其地では親切な待遇を受けた。^(註十三)九月三十日(〇九月三日)サン・フランシスコ號は北緯三十五度半、關東の東南岸

の遙か沖二百リユウのところまで難破した。たゞサン・アントニオ獨り航海を續けることが出来た。全く破損したサン・フランシスコ號は閩礁にのり上げて破壊してしまつた。船首はくだけ、數名の乗組員は死んだ。併し船員と乗客の大部分は陸に避難することが出来た。難船に遭つた人々はユバンダ(Youbanda)といふ一番手近の村に於て親切な取扱を受けた。同國の領主は難破船の報告を受け且つドン・ヴィヴェロの資格を聞いてゐたので、ウンと好遇するやうにと命令した。如何にも、總督のヴィヴェロはマニラに捕虜となつてゐた二百人の日本人(多分サン・フィリッブから捕獲の復讐として)を解放し、之をおくつて來たのであつた。薩摩の領主は自らヴィヴェロを訪問し、三百人の人々を全部三十七日間自費を以て養つた。此間に二人のイスパニヤの士官が、君主と其子なる公方様訪問の爲、駿河と江戸に行つた。江戸は四十リユウの距離にあり、駿河は八十リユウの距離にあつた。

八十日後、使者は皇帝の役人と共に歸つた。皇帝はドン・ヴィヴェロに哀悼の意を表さしめ、朝廷に行くことを許し、同時に彼は遺失物は皆戻してやるといふ保證を彼に賦與せしめた。

ヴィヴェロは十月の末頃出發した。彼は先づ十リユウの

距離にあるオタキ(Ohtaki)に行つた、同地は人口一萬あ

まり、首都であつた。君主は素晴しく歡待した。彼は同地

を経て世^{フランシスコ・エリチエ}子の朝廷なる江戸に赴いた。フランシスコ會

の宣教師等は此市内に一つの傳道所を有して居つたのであ

るが、取敢えずイスパニヤの貴^{セイニール}族に奉仕した。世子は二

日目に、祕書役の筆頭たる上野殿を以てヴィヴェロを召喚

せしめた。謁見に當り、世子はイスパニヤの貴族をして膝

元四歩の所まで進ましめた。公方様はヴィヴェロには三十

五歳位に見えた。顔は大分褐色をしてゐたが、どこか典雅^{イブ}

なところがあつて立派な風貌をして居つた。彼はヴィヴェ

ロに對して手篤い待遇をした。世子の宮殿は壯麗にして善

美をつくした裝飾がしてあつた。二萬人以上の者が其處に

使はれて居つた。

ヴィヴェロは、江戸にて四日過すと駿河に行つた。^(註十四)一週

間後に彼は皇帝に拜謁した。其時の通譯にはイエズス會の

神父ジャン・パプチスト・ポルロ(P. Jean-Baptiste Porro)

が之に當つた。^(註十五)

皇帝は二段からなる高い臺の上に乗つてゐた。其臺から

四歩前の所に金色をした粗布があつて、其陰にヴィヴェロ

は居つた。

皇帝は六十歳位に見えた。彼は中背で、可也肥滿し、顔

色は世子よりは褐色が薄かつた。彼の風貌はどこか犯すべ

からざるところがあると同時に情味があつた。ヴィヴェロ

は相變らず神父ジャン・パプチストを通譯にして居つた。

ヴィヴェロは謁見最中大名の入つて來るのを見たが、こ

の大名は百歩の所で平伏し、數分間は面を地に伏せ、二萬

ダカットの價値ある金銀並に絹を献上して引き退つた。ヴ

ィヴェロは非常に鄭重に送り出された。

時に彼は皇帝に提出したいと希んで居た要求の覺書^{メモリアル}を上

野殿の手にわたした。

第一、帝國に在住する各教團のキリシタンの宣教に對す

る公式の保護、並に其傳道所並に教會堂を自由に使用すべ

きの件

第二、皇帝とイスパニア王間に於ける同盟承認の件

第三、該同盟の證として、イスパニヤ人の不俱戴天の敵

にして、最悪の海賊たるオランダ人追放の件

翌日、素晴らしい食事がヴィヴェロに供された後、返事を

聞かされた。

皇帝は、イスパニヤの貴族が、たゞ其宗教と君主の爲し

か目安においてゐないのに感嘆の情を披瀝して居つた。

前の二箇條は許可せられた。然るに第三箇條に至ると、何分オランダ人は日本逗留を許可した皇帝の約束を受けてゐた爲、此年之を容れることは困難であつた。併し皇帝は此貴族から、オランダ人の眞の人柄を知らして貰つたことをヴィヴェロに感謝して居つた。

皇帝はアダムスが建造したヨーロッパ型の船の一隻を彼に呈供して彼を新イスパニヤに送ることとし、尙、新イスパニヤの坑夫が非常に熟練してゐる事をもつて著はれ、日本の坑夫がとれる筈のものをせい／＼半分しかとり切れないといふので、坑夫を五十人得たいといふことをフィリッピン王にかけ合ふことを彼に願つた。

ヴィヴェロは此命令を引き受ける前に、坑夫の件に就いては受け合へない由を答へ、尙又若し陛下ソナルタス下のお許しあらば予はサンタ・アンナ號のゐる豊後に行き、而も此船が自分を乗せて行けるやうな様子ならば之を用ひたい、併しさうでなかつたら、皇帝の申出を悦んでお引受しようと思はれた。副王は駿河の朝廷に歸つて來た時の事や、自分が出發の時の事等、それから坑夫の事に就いて尙も積極的の答をすべきを約束した。

平戸に屬してゐる生月(Ikitsuiki)の島には、一團のキリシタン教徒があつた、之はドン・ジェローム籠手田殿(D. Jérôme Cotendadono)。領主の近親なるドン・バルタザール一步殿(D. Baltazar Tchiboudono)の舊臣たちから成りたつて居つた。之等の領主は追放されてゐたのであつた。元ゼローム籠手田リユトヤンの下役にして同國に於ては重役の一人、なほ全島を統治して居つたガスパルド・ニチゲンカ(Car spard Nichigenca)は山田(Yamada)に住つて居つた。ガスパルドと其妻ウルスラ(Vrsule)とはいづれも實に高潔な人であつた。彼等が長男ジャン・ニシマタイチ(Jean Nichimatachi)も亦父母と同じことであつた。ジェロームが追放された時、ガスパルドは其統治權をとられた、而も其れは二人の部將に分配せられた。イヌイ・ウマノジウ(Inouye Umanodgio)は山田を授けられ、其父のコンドチサン(Condotchisan)は(Tatchinofama)を委せられた。コンドチサンはガスパルドの女でマリアといふ秀れたキリシタンの夫であつた。彼は其妻が其勤行をすることを自由に任せておいた。然るにコンドチサンの父は彼女を酷註十六くいぢめ終には怒つて嫁の父を告訴するに至つた。法印は高野(Coia)の坊主と山伏(Yamabouchi)の二人の坊主を

遣はして、奉行に嚴命を下し、特にガスパルドに對しては嚴罰に處すべきの命令を傳へた。彼等は領主の名に於て、山田の奉行ウマノジヨウに命令を下してガスパルドと其妻、及び其長男をキリシタン教徒なる廉を以て死刑にすることゝした。同地方の住民はウマノジヨウの家に召集された。既に己が身の上を承知のガスパルドも亦召集せられた。彼は精神的の武器を身につけんと欲して、聖フランシスコの繩を帶にし、聖像の前に跪いて、熱心に祈禱を捧げ、その上で法廷プラトナルに出た。二人の兵が出て来て彼を捕縛しようとする、ガスパルドは初め、元の生れが生れである爲に、此屈辱に従ふことを躊躇した。併し、之はキリシタンといふ呼名の爲であるといふ事をきくと、兩手を差し出し、かくて囚人として他の房に入れられた。其妻子を召しとる爲に武装した人が遣はされた。息子は父と同じく己が身をひき渡したが、九歳になる弟は懷劍をとつて捕吏サリストの一人に傷をつけた。捕吏の方では其武器を取上げてホツとした。ジヤンと其母のウルスラとは同じく繩にかゝり、ものゝしく護衛をつけられて家の中におかれた。兩側の者は夫々死の覺悟をしてゐた(註十七)。然るに一方ウマノジヨウは許しを得んものと坊主にびつたりくつついてゐた。併し之は何にもな

日本吉利支丹宗門史(吉田)

らなかつた。ガスパルドは磔刑に處せられんことを願つたが、同島にはかうした處刑の方法が用ひられなかつたので、それは駄目であつた。

十一月十四日(〇十月十八日)土曜日、夜の明方にガスパルドは刑場に引き出され、ウマノジヨウの手で死刑に處せられた。因にウマノジヨウは彼にかくして面目を施させることを望んでゐた。同時に人々は妻子を連れに行き、其夫や父を見せてやるといふことにして彼等をつれ出し、途中で隙を窺つて殺してしまつた。

ガスパルドとウルスラとは共に五十四歳で、息子のジヤンは二十五歳であつた。キリシタンは其遺骸を墓地に埋葬し、教會の祈禱を唱へる事が出来た。マリアは其兩親と運命を共にすることが出来ないのを悲しんでゐたが、ジヤンの妻のイサベラも亦マリアと同じであつた。併し迫害はやんだ。

法印は平戸の住民さへも迫害したい位に思つてゐた。併し其政治は彼が孫にして後繼者なる、ミシー(Micie)の子に一任してあつた爲に、此若者は彼のいふ事をきかず、従つて半は其儘で變りなかつた。かうした事情の中にアウガスチン會の神父エルナンド・デ・サン・ジヨゼフ(P. Hernandez)

(七三)

一四三

de S. Joseph)はキリシタンの勢力を支持して居つた。

此年聖ドミニコ會の總長ハイネ・シニョラ、神父ガラミニオ(P. Galaminio)はフィリッピンの地方の宣教師等によつて大事業が出来上つた事を聞いて、長老に命令を下してフィリッピン、日本及び支那の事柄に關して年報を作製し以て異教徒の改宗、聖なる教會の宣傳、天主への奉仕を促さうとした。一六〇九年六月十八日(〇五月十七日)附の總長自身の手になつた此書翰はマニラの學林コレジオに保管せられた(註十八)。

十二年間の休戰條約はフランドルに於て、アルベール大公(archiduc Albert)とオランダの革命黨との間に締結されて居つた。そして國王ドン・フィリッポ三世(D. Philippe III)は四月之を批准した。此休戰條約は此年末に至つて始めて印度に知れた(註十九)。

(註一) Lettera annua del Giappone del 1609 e 1610, scritta dal P. Gio. Rod. Girano. Roma, 1615, 8.-Morte di IX christiani-Orfanel. c. 3, 4, 5.-Aduarle, c. 68.-Sicardo, l. c. 9, 10.-Auteur Francoiscains.-Juan de la Conception, 9 et 14.-Relation de D. Rodrigo de Vivero y Velazco (Revue des Deux-Mondes, janvier à avril 1830). -Valentyn. c. 3.-Recueil des voyages qui ont servi à l'

établissement de a C. des Indes orientales, t. VII, pp. 109 et 140—210.-Monteur des Indes orientales, t. I, p. 148, et t. III, p. 237. Purchas, vol. I, p. 406.-Astley. -Ann. des Dairis, Supplément

(註二) 又ポルトガル人によれば Lequios。詳細については Les Lettres édifiantes, t. XXIII, p. 210. 一七八一年日里版を見られよ。

(註三) 監禁中、尙寧は最も高潔な品性を示した。征服者等は其頑強なるに驚嘆し、二年の後、鄭重にして其故國に歸した。

(註四) 最も甚しく不足してゐたものは供物用の葡萄酒であつた。

(註五) 臨終に際し、彼は友人たる異教徒の一醫者に次の如き美辭を並べて話しかけた。彼は醫者にいつた『私は屢々御身の心御身の偶像信仰を根抜きにしようとしたが嘗て成功しなかつた。併し私の最後の言葉である此一寸した言葉を忘れないだらうと信じてゐる。御身は私が死の苦しみに悩まされてゐるのを見てゐられる。此斷末魔の苦しみの中に、私の魂は私の肉體を捨てようとしてゐる。時は來た、もうすぐ私は現世をはなれて、御身とお別れするでせう。この時に當つて、魂の滅することについて虚言をいふことは出來ないといふことを御承知願ひたい、又私は改めて、我師イエズス・キリストに教へられた事の外に眞理はないといふことをはつきりいつておきます、其他はどの宗教も皆

空虚であり愚である。であるからキリシタンの所に行つて洗禮を授けていたゞきなさい。かくて御身は永生を得るであらう』彼は沈黙し、彼の友人は其勸告に従うことを本氣に約束した。(Ann. di 1609, p. 99)

(註六) 附録十六、十六ノ乙、十七、十七ノ乙

(註七) 彼等は亦其年のポルトガル船の通るところを襲ふべき使命を帯びてゐた。併し、アンドレ・ペツソアによつて指揮されてゐた此船は彼等の来る前にマカオを出發した。オランダ人は臺灣のほとりに行つて待つて居つた、然るに霧の爲に彼等をのがれて、恙なく長崎の港に入つた。

(註八) それはパーチェイスに與へられたが、日附もなく署名もない。附録第十八號。神父ヴァレンチン・カルヴァリョ P. Valentin Carvalho は、此手紙の抜粋を吾人に殘しておいてくれた。一六一五年の附録にある彼が手寫の報告を見られよ。尙又司教より王におくつた一六〇九年十月十日附の覺書を参照。其翻譯は附録第十九號。

(註九) 附録第二十號。

(註一〇) スペックスは一五八七年頃ドルドレヒト Dordrecht に生れ、有名なオランダ Ostende の攻圍に参加した、このオランダの攻圍は三年と八十日(一六〇一年二月五日—一六〇四年九月三十日)つゞき、結局エスパニヤ人が莫大な犠牲を拂つて此町を占領した。

(註一一) アダムスの仲間のオランダ人等は當時浦川 (Ourag-

日本吉利支丹宗門史(吉田)

ava) に隔離され——この港はイスパニヤ人によつて賑ひ、フランシスコ會の宣教師はそこに一つの教會堂を建てた。

(註一二) 一五五五年に生れた。彼はフィリッピンの總督になる前に新ビスカイ (Nouvelle-Biscaye) の總督をして居つた。彼は一六〇八年六月五日から一六〇九年四月まで總督代理であつた。

(註一三) 此船は翌年アカブルコ (Acapulco) に向け出發した。神父モンテスは途中で亡くなつた。

(註一四) 駿河は當時人口六十萬あつた。

(註一五) シカルドは尙通譯として神父エルナンド・デ・サン・ジョゼフを任命した。

(註一六) 彼女は其夫を去つて父の許に逃げて行きたいと思つてゐた。

(註一七) そして息子は殊にしつかりしはられて手を天に上げる事も出來ず、魂を天主の方に自由に向けた。TIRIZAVIA
la mente verso Dio (Annue)

(註一八) 附録第二十一號。

(註一九) オランダの狀勢は、海上で許されてゐた自由を利用して十一月十七日アジアに於ける國家的施設の最高の總督をつくつた。ピエテル・ボーツ Pieter Both が最初に擧げられた。